

陽明文庫蔵 頓阿日次家集（零本、貞和二年前半部分）翻刻

藏 中 さ や か

A Transcription of *Tona's Hinami-kasyu (the first half year of 1346)* Owned by Yōmei Bunko

KURANAKA Sayaka

Abstract

This manuscript is a transcription of *Tona's Hinami-kasyu (the first half year of 1346)*, which is owned by Yōmei Bunko. *Tona* (1289-1372), one of the prominent poets in the Medieval Period, collected well-known poems, such as *Souan-syu* and *Zoku-souan-syu*. Relevance of this transcript to those poems has been published elsewhere. This research is made possible by the courtesy of Yōmei Bunko and Mr. NAWA Osamu, head of Yōmei Bunko. I would like to note my special thanks to them.

キーワード： 中世文学、和歌文学、頓阿、家集、陽明文庫

Key words: medieval literature, *waka* literature, *Tona*, the collected poems, Yōmei Bunko

陽明文庫蔵 頓阿日次家集（零本、貞和二年前半部分） 翻刻

藏 中 さ や か

本稿は陽明文庫蔵 頓阿日次家集（零本、貞和二年前半部分）を翻刻したものである。

書誌は以下の通りである。

頓阿日次家集（零本 全一六七首）

〔陽明文庫一般文書目録 七七五六三 「和歌御會」貞和二年〕

外題「貞和二年」（打付書・本文とは同筆か） 内題「貞和二年正月」

法量 縦二九・五糎、横二一糎 室町後期写

袋綴一冊（仮綴・楮紙・茶染紙） 墨付一三丁

表裏表紙とも本文部分と同料紙 歌題の下に和歌一行書、一面八行

本資料は、頓阿日次家集の貞和二年（1346）正月～七月部分に相当すると考えられるが、内容等については別稿に詳述する。

掲載にあたっては、所蔵者である公益財団法人陽明文庫に格別のご高配を賜り、文庫長名和修先生にご教示をいただいた。特に記して御礼申し上げます。

【凡例】

- 一、各歌題の上に歌番号を算用数字で記した。
- 一、詞書、注記の位置はできるだけ原態に忠実な形になるよう努めたが、四字題の場合や歌題上に注記がある場合等は、紙面の都合上、歌頭の位置を下げる等した。
- 一、歌題を二行書きする場合や和歌末尾の数字を折り返し裾書きする場合は、紙面の都合上、一行に収め、これを特に注記しない。
- 一、旧字や異体字については、適宜、通行の字体に改め、丁替りは「」で示した。
- 一、欠損文字が存する場合にはその字数を計って□を挿入し、残量によって文字が推定できる場合にはその文字を（ ）を付して右傍に記した。
- 一、判読困難な文字が存する場合にはその字数を計って■を挿入した。
- 一、文字の上にさらに別字を重ね書きをする場合は、上に書かれた文字を本文として採り、下の文字は（ ）を付して右傍に記した。
- 一、なぞり書きをしている文字については、これを特に注記しない。

貞和二年正月

十二日中条備前守秀長会三十首に

1 若菜 ふる雪のはる、ひもかな春の日にきえずはありとも若菜つみてん

2 野螢 あきとまつよるの螢のかけよりやみたれそむらんまの、かや原

3 山月 月かけと谷の水としなかりせはひとりみ山にかけやと、めん

4 秋露 花はまたうつろひやらてこはき原下葉そ露の色にいてぬる

5 稀恋 一すちによしたえはてね玉かつらかくるそなかきうらみな分たる

6 初春霞 けさみれはかすまぬ方もなかりける空に□□□や春のきぬらん

「一オ

7 雪中鶯 ふる雪のあしたの原にきゆるなり春をたとらぬ鶯のこゑ

8 寄竹祝 時しあれば竹のはやしにすむ人もおさまれるよと□てや□□ん

當座三十首に

9 餘寒 かすみたつ山はのとかにみえなからふきくるかせはさゆる春かな

10 帰馬 みるま、にかすみへたて、かへるかり山とひこゆるほともしられす

11 里擣衣 あれ残る里をのしらせてみませ山ふもとのきりに衣うつ也

12 苔 なみこえぬかきりしられてすみよしのきしの松かねこけむしに分たけ

13 神祇 あとたる、三の神かきかすく（れな）にまもれる千代を君そかさねん

「一ウ

十五日六条性阿上人坊にて哥よみ侍しに

14 雨中柳 あをやきのみとりのほかにまたそめぬいとをもませて春雨そふ□

15 霧中鹿 しかのねはそらにきこえてきりふかみのはらのすゑは山もしられす

16 経年恋 人心うきはみえゆくとし月におもふかきりはなとかしられぬ

17 寄水尺教 よしさらは心のみつはにこるともたのむちかひにみやまかせん

廿八日梶井宮月次御會三首

18 雪中鶯 はれやらぬ雪には春もしらしとやけさ鶯のなきてゆ□らん

19 梅薫風 こすゑよりさそひてきつるむめか、を袖にそわくる春の夕かせ

「二オ

20 祝言 よものうみしつかになりぬなにはつのかせもむかしにたちやかへらん

三月 九日花巳開 十五日民部卿前右兵衛督など玄昭

仁和寺山庄の花みられ侍し時

21 花週年友 いく春もおなしこかけをたつねこむ花よりほかの友もかはらて

當座三十首に

22 夜花 ふかきよの月まちいて、山のはの花もいまこそあらはれにけれ

23 谷花 たちならふ花のさかりや谷かけにふりぬる松も人にしられん

24 海邊花 煙にもまかはぬ雲やすまのうらにうへしわか木のさくらなるらん

「二ウ

25 軒花 山さとはにはにつも□ぬしらゆきの軒はをうつむ花さかりかな

26 花交松 枝かはすみ山さくらや咲ぬらんさのみは松のゆきものこらし

廿日性阿上人坊の當座百首に

27 残春 いつくにかわかれし花のさきたちてしはしをくる、春をまつらん

28 古寺紅葉 たつねくるもみちのかけに庭ふりて人こそみえね秋の山寺（は）

29 湖水 た、ぬ日もいくかになりぬふ（た）とのうみや氷かさぬるたこのうらなみ

年改調五首之内

30 林雪 冬かれの雲のはやしにふる雪ははなの所といまもみ□つ、

31 吹上濱恋 吹上のまさこ口は山とまかふなりつもる思をしる人もかな

「三才

32 住江恋 すみのえにおふなる草の名もしらすあらはれにけりきしの松かね

33 倉布山恋 ふかきよにいそくわかればかひもあらしやとはくらふの山にか□とも

34 後瀬山恋 こりいてぬわれそつれなきうき人のかはるのちせの山のしぬしは

35 賀茂 そのかみもいくよになりぬ神山のふもとにちかきかものみつかき

36 尺迦 よにいて、月のみかほのてらすかなこれやむかしの雪の山人

37 葉師 春のくるそなたのかせのふきぬれはこほるやまるはあらしと思ふ

38 弥勒 ふかきよのやみをもてらせてやられて猶あかつきを月はまつとも

39 大日 ものことにあまねくてらすことはりやはしめていてぬひかりなるらん

「三ウ

40 寄日祝 ひのかけのてらすかたこそわか君のめくみのをよふかきりなりけれ

廿四日ひよしへまうて侍し時しかの山こえにて

41 (しか) しかの山花はあとなくなるまでにひらのたかねの雪そのこれる

宗點五首之内
二首 廿五日中条備前守聖廟法楽十首

42 見花 一もとをちるまではみし山さくらをくる、花のさかりたつねて

43 惜花 しはしなをさそひなすてそ吹まよふあらしを花の色とたにみん

44 夏草露 夏ふかみしけさまざれ口としたにのみかくれのをの、草のゆふつゆ

45 初秋風 一葉のみちるとはみれとをときけははやこからの秋のはつ風

「四オ

46 紅葉増雨 今朝よりも色つく山のこすゑかなあすも時雨はそめやつくさん

47 眺千鳥 ねさめして心あるあまもねをやなく千鳥ともよふ松のうらしま

48 寄山恋 雲かゝるふしのたかねにたつけふりかくればつへきわか思ひかは

49 寄思草恋 ほにいて、みえなはつらし思くさおほなかもとになにしけるらん

50 田家煙 夜のほとのかひやのけふりきえやられて田面に残るあさかすみかな

51 神祇 あとたれて人をもわかぬ神かきにあまねきかけはあらはれにけり

宗點七首 御所二
遍知院宮一 大今町院宮一
玄覚禪師一 予二 廿七日花町彈正親王家御會二十首に

52 残花 山ふかみをくれてさける花なくはひかすはかりに春やのこらん

「四ウ

53 江蛩 とりのゐる玉えやいつこ夏かりのあしまにとふは蛩なりけり

54 惜月 いるかたのみねのこのまをもる月そ心つくしのかきりなりける

55 浦霧 名もしるししのふのうらのゆふきりに煙もみえぬあまのもしほ火

56 別恋 なきぬれとわかれもやられてとりのねのきこえぬまてにあくるよはかな

宗匠已下被進櫻帚 廿九日青蓮院入道二品親王家に住吉
題者宗匠 序者少納言景長朝臣 玉津嶋を繪にあらはして哥講せられ侍しに

57 花契多春 色かへぬそのふの竹をいくちよの友とか花もちきりをくらん

同夜聖護院法親王家御會三首

「五オ

58 残花 なへてよにちりぬる比は山さくらまかはて残る雲かそ見る

59 暮春 入あひのこゑよりのちはあかつきのかねをかきりにしたふ春かな

60 待恋 いまこむといひし月日はすきぬれとまつはならひになる夕へかな

當座五十首に

61 野若菜 わかなつむのもりのか、みかきくもり雪のはれまもみえぬ春哉

62 夕花 花の色に山はさなからうつもれてゆふるみねの雲もわかれす

63 谷鹿 あさからぬたにの心もさをしかのなくねにしれとつまや(五)□ふらん

64 渡霧 きりこめてちかつくきはみえねともほとなくよするよとのかはふね

「五ウ

65 月前雪 うつもる、木のまにかけはもえね(マ)とも雪にくもらぬ山のはの月

66 稀恋 こひしなておなしつらさをなけ、とやわすれはて、は思いつらん

67 懷舊 うきみにはいつくをし(マ)のふむかしともわれさへしらてぬる、そてかな

豪瑠五十首哥をよみて點をこふへきよし

申けるかみまかり侍しのち子息幸成素意に

まかせて合點すへきよし申侍しかはかへすとてつ、

みかみに書侍し

68 このもとを思こそやれよそにたにこと葉の露は袖ぬらしけり

「六オ

四月 十三日將軍家三首

69 朝更衣 はなそめの衣をさへにぬきかへてけさまた春にわかぬるかな

70 待郭公 月よりも山のあなたやおしむらんふけてもいてぬ時鳥哉

71 祈尋恋 いたつらにあはてかへらはたむけせししをいつかみわの神杖

廿四日夜初聞

郭公 廿五日中午備前守北野法樂十首

72 □點判 雪中若菜 (五)うつもれぬのさはの水を雪まどやふるひも人のわかたつむらん

73 仙阿 春日遲 (負)山のはのかすみとをくみえしより空にもをそく□ひかけかな

74 道貴 待郭公 (勝三首之内)なれをしそつらしとはおもふ郭公まつをならひにとしのへぬれは

「六ウ

75 道貴 山初鴈 (勝)はる、まもさすかありけりはつかりのくるかたみゆるみねの秋きり

76 仙坊 湖月 (勝)まの、うらやおはなかつゆにやとりても月はなみまのかけと見えつ、

77 師阿 風前落葉 (勝)をくら山あらし吹こすほどみえてみねよりたかくちる木の葉かな

78 仙坊 寄雨恋 (勝)いまさらになむひつ、もねすよるのあめ月にもまちしならひなければ

79 師阿 寄朽木恋 (勝)谷ふかきくち木のはしのなそもかくたのみかたきを恐わたるらん

80 慶忍 名所浦 (持)身ひとつをわふといひてもよるへなきうきよに猶やすまのうらなみ

81 師阿 独述懷 (持)よのうきも心ひとつになけくかな老にともなふ人しなければ

廿五日被仰御百首
卅二人奉行勤修寺大納言
廿九日梶井宮月次御会三首

「七オ

82 庭落花 木すゑよりさそふにあかてさくら花ちりしく庭に春風そふく

83 池上藤 ふちの花うつろふかけは池水のそこより浪のたつかとそみる

84 旅宿夢 草まくら都をしのふ思ねにあらぬ夢ちのなにとみゆらん

當座五十首に

85 鷹狩 はしたかのす、のしのやにやとかりてくれなはあすもとたち尋ん

86 見恋 うき中は水にうつれる月なれやかけのみ、えてむなしかるらん

87 白地恋 かりそめにかはす一夜のくさまくらいつむすひける契りなるらん

家頼かもとに哥よむ所にまかりあひて

「七ウ

88 立春

けさも猶みゆきふるなりいかにしておなし空より春のたつらん

89 萩

いまはよにもとの心のとも、なしおいてふるえの秋はきの花

90 寄浦恋

うきよ猶おもひもたえすなからへはいつをさかひのうらのあみなは

91 寄玉恋

玉のをのとくる心もみえなくにわれのみなどか思みたる、

92 述懐

しはしたに身を、く山のあらましをおいの心に猶いそくかな

93 祝言

おなしくはふるきにかへれ我君の御代にさかゆくしきしまのみち

八日左大臣家に御百首のためとて哥よ

まれ侍しに

「八オ

94 若菜

春くればまつふみわけてかすかの、きえぬゆきまに若菜をそつむ

95 柳

あをやきのいとほみたれぬかせのまにむすほ、れたる春の朝つゆ

96 花

なにとた、山はにしきの花の色にかすみの衣たちかさぬらん

97 歎冬

いたつらにさかりすくとも舟よせてたれかこしまの山ふきの花

六月

十三日將軍家月次三首

98 螢

ねにたつるなみたならねと、ふ螢おもひやもえて玉とみゆらん

99 納涼

なくせみのこゑもひとつにひ、き、て松かけす、し山の瀧つ瀬

100 隔恋

こかれてもかひこそなけれみくまの、うらよりおちのおきのつり舟

「八ウ

宗、點三首内

同夜庚申細河陸奥守三十首に

101 夏月

あけやすきならひなりとも月かけの空行ほとをまつよはもかな

102 照射

さ月やみくらきをたのむさをしかのたちとをしるほとしなりけり

103 杜蟬

かたをかのもりの杪のゆふひかけのこれるほとせせみも鳴ける

104 夏祓

みそきしてあさの葉なかすかはのせに井せきの水に夏もとまらず

105 旅行

あつまちそおもへはとをきふしのねのふもとにきてもひかすへにけり

宗、點五首内

廿五日中條備前守月次十首

106 帰鷹初春

はるしらぬみはふりはて、こし方に雲井のかりや立かへるらん

107 折花

いと、猶かしらのゆきの色そへて花のかさしは老もかくれす

108 遠夕立

たかさとをまつすきぬらん山のはに雲たちのほる夕立の空

109 初秋露

をくつゆもけさより秋としら玉のをの、あさちにかつみたれつ、

110 嶺月

よもよりははれぬ雲井とみしかともたかねはことに月そさやけき

111 初冬時雨

冬きぬとたれにつけてか神無月さとわくけさのしくれなるらん

112 寄風恋

ゆく舟のやへのしほかせ一かたにたのめはやかてかはる中かな

113 寄塩木恋

人心うらにこりつむもしほ木のいつをかきりにもゆるおもひそ

114 名所鶴

あはれともきく人あらはわかのうらのあしへのたつにねをやそへまし

115 旅宿

草まくらおもふこと、てふるさとの一夜ゆめにみえぬまそなき

116 將軍家七夕七首

月日こそはるかなりしをあまのかはけふさへ霧のなにへたつらん

117 秋の日のまたくれぬよりあまのかは雲のたちるに君やまつらん

「九ウ

「八ウ

- 118 たなはたの心はあきにならしてやとしにかはらぬ契なるらん
 119 かよふともあともものこらし天のかはまた霜をかぬかさ、きのはし
 120 あまのかはともうきつの浪まくらかはすともなくあけぬこの□は(志)
 121 たなはたのけふの契をためしにてわか君か代もたえしとそおもふ
 122 まれに来てうらみなからやたなはたのあまのは衣たちかへるらん
 宗點五首内 十七日慶運法師月次三首 「一〇オ」
 123 草花露 はきのうへの露となりてや雲井とふかりのなみたも色にいつらん
 124 寢覚鹿 里遠きみ山の秋をしかのねのかよふねさめに思こそやれ
 125 恨絶恋 あま人のかれなてかよふみちもなしつらきはさとのしるへ成けり
 七月 三日左大臣家續百首に 「一〇ウ」
 126 若葉 あすからとなにおもひけむもえそめしわかさをけさは雪そふりつむ
 127 柳 一しほのみとりともみすたかさこの松にたちそふ玉のを柳
 128 藤 あらしふく松にさかすは藤の花をとせぬなみのたつとみてまし
 129 卯花 しけるより木のまにもらぬ月かけをまかきにうつす卯花のやと
 130 納涼 をく露の残るもす、しうつせみの葉山にはる、村雨のそら
 131 月 をはすての月やいつくもてらすらんなくさめかねてみつるよはかな
 132 雪 ふるほとはみねにこほりてしら雪のつもるあさけに雲そはれゆく
 133 初遇恋 うきみにはおもひのほかの契にてこれをならひにえこそたのまね
 134 暁別恋 むつことは猶のこりあるきぬくにやかてつきぬるかねのをとかな
 135 夢 むかしいまゆめはへたてもなかりけりうつ、や人のまよひなるらん
 將軍家七夕七首 端作詠七夕七首 和哥云々 「一一オ」
 當座五十首に
 136 暁立春 ゆくとしは猶くれ残る有明の月こそかすめ春やきぬらん
 137 松上藤 すみのえの姿にや藤の咲ぬらんしつえならても浪そか、れる
 138 虫聲滋 にはもせに野邊の千くさをうへしよりうつさぬむしのこゑそしけれ
 139 霧中初鴈 秋の日のかけはこもれるゆふきりにほのかにみえてかりは来にけり
 140 海村雪 ふねよせて問人もかなふる雪にあとはをしまのあまのとまやを
 141 寄雨恋 ふるあめにあめのよさはらぬまてはかたくともはれまをたのむ契ともかな
 142 懷舊涙 みにちかくきにけるおいのなみたかはかへらぬ水やむかしなるらん
 廿三日伊豫権守重成会五十首に 「一一ウ」
 143 遅花 よしなしや花のあるしとなりしよりた、一もとのさかりをそみる
 144 河蚩 をろかななるおもひなればやとふ蚩なみたのかはの玉とみゆらん
 145 紅葉 色くくのにしきとみゆる紅葉はをさのみ時雨のそめつくすらん
 146 湖水 雪さゆる山かけとてやひらの海の汀もとをくこほりとつらん
 147 暁鷄 したりおのゆふつけとりのなくこゑになかきねふりをさます夜もかな
 西林院二品親王家續千首に 「一二オ」
 148 野子日 のへにひくねのひの姿のひとしほや千代のみとりのはしめなるらん

- 149 里花 さくらさくごとをはかれすたつねきてまつとしもなきあるしをそとふ
- 150 花手向 こへ行もなにゆへならぬ山ちとや花はたむけとちりまかふらん
- 151 澤杜若 きぬにするあさ、はをの、かきつはた水にもふかき色そうつれる
- 152 夕蛙 ゆふくれはまた春さむき池水にそれとしもなくかはつ鳴也
- 153 田家卯花 うのはなのさけるかきねはさなへとる田子の衣をほすかとそみる
- 154 渡郭公 ほと、きすいつくの山をいつみかはわたりをとをみほのかにそきく
- 155 樽 我門のあふちさくなり花の色はおもひもかけぬ夏のこすゑに
「一二ウ
- 156 袖五月雨 さみたれにかはせの浪もたかしまのみおのそま木やくたしかぬらん
- 157 池童 いひいてぬ池のこ、ろのおもひをもゆるにみせるとふ童かな
- 158 寄測恋 あさくなる契もしらすあすか、は昨日のふちを猶たのむかな
- 159 寄岡恋 ふるさとのゆき、のをかもある物をなとわか中のかよひたえけむ
- 160 寄田恋 よ、かけていか、たのものさ、のいほむすふもかりの契とおもへは
- 161 寄萱恋 河上のねしろたか、やあらはれてみたる、かひもなき契かな
- 162 寄祓麻恋 おもひ入こ、ろをぬさとくたかなこれやこひちのたむけなるらん
- 163 山家虫 山さとはくさよりさきにかれに(音分)人めを猶や松むしのこゑ
「一二オ
- 164 鞆中河 しらなみのよするなきさにやとかりてぬる、をあまの袖にたくへん
- 165 名所沼 あやめにはおひましれともつくまえのぬまのみくりはひく人もなし
- 166 如是作 春あきの時をたかへすあめつちのなすそまことのみりなりける
- 167 寄龜祝 よろつよを君か心にまかすれはかめのうへなる山もたつねす

(一二ウは四行のみ、以下余白)

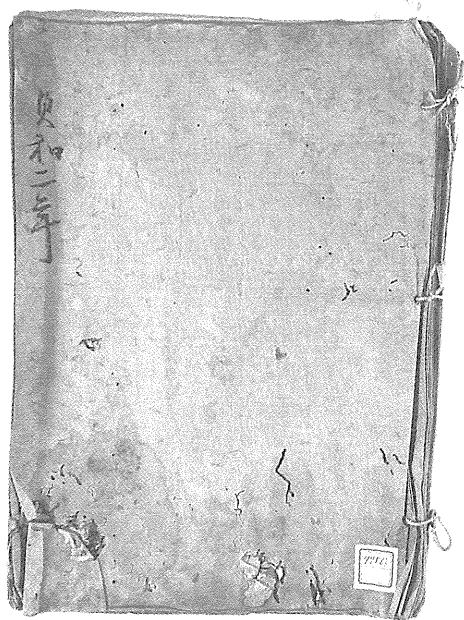
〔注〕

- 30 注記「年政」存疑。
- 41 歌題の位置の「しか」は擦り消し。
- 46 「時雨は」は本行の「や」を擦り消して「ハ」を右傍書。
- 65 「もえね」の「え」は「ら」に近い字体。
- 72 上部裁ち切れあり。

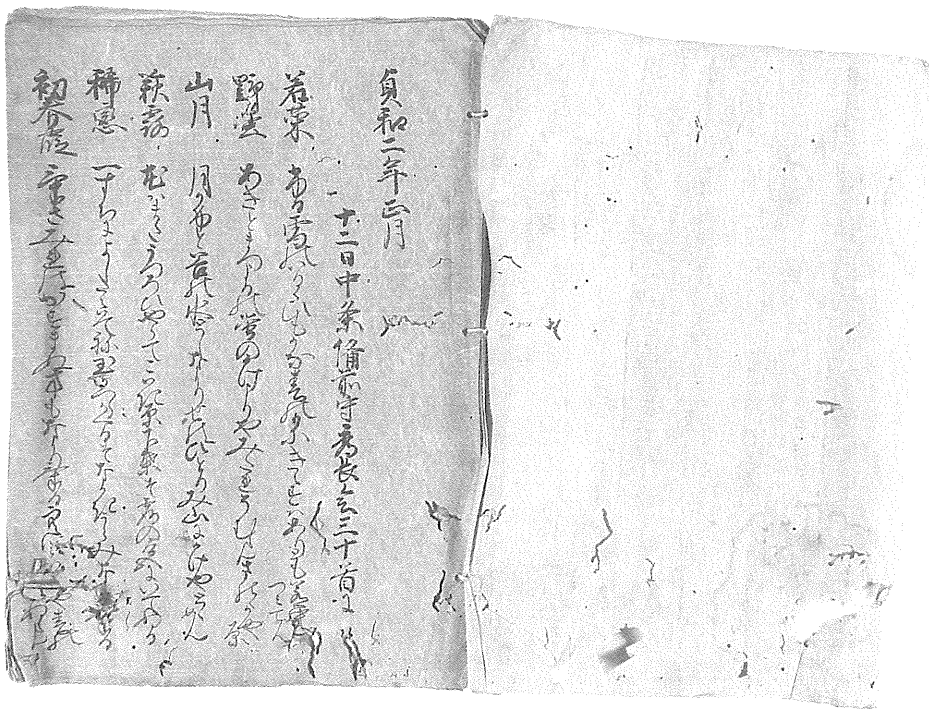
付記

本稿は二〇二一年度神戸女学院大学総合研究助成による研究成果の一部である。

(原稿受理日 二〇二二年二月二七日)



図版①表紙

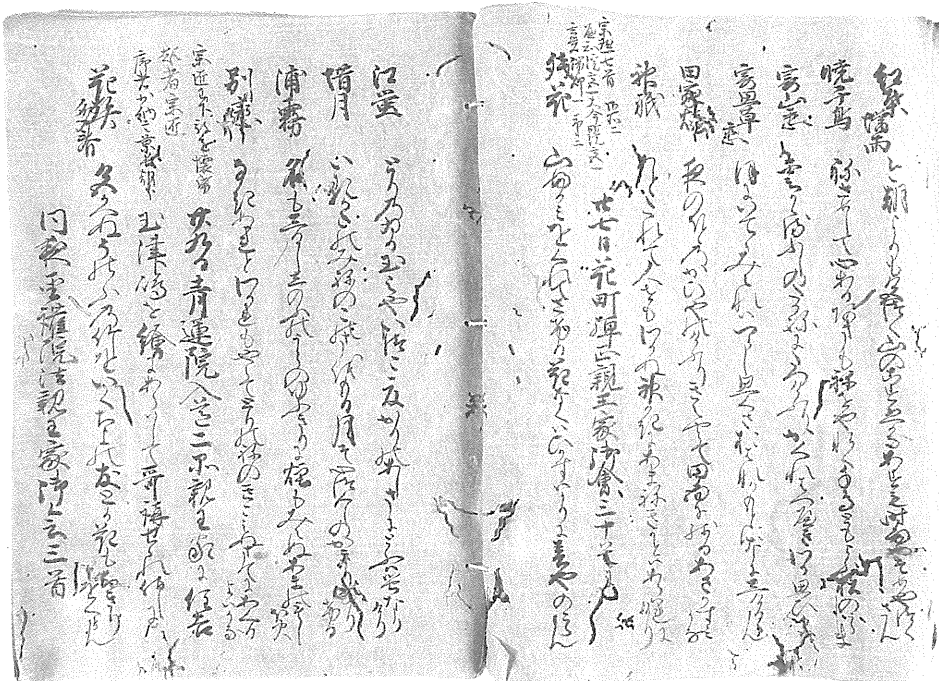


貞和二年三月

十二日中兼備前守右大臣三十三首

若菜 ありまはるいしんをまふふしてありもまはる
跡 ありまはるいしんのりりありまはるいしん
山月 月夜を真夜中よりさびひりふまはるいしん
秋露 おもひごとくありてこほりまはるいしん
稀恩 下りてありてありまはるいしん
初春夜 春をまはるいしん

図版② 一才



紅雲 雲と相ひあはるいしんをまはるいしん
曉子鳥 曉をまはるいしんをまはるいしん
雲心 雲をまはるいしんをまはるいしん
雲草 雲をまはるいしんをまはるいしん
田原 田原をまはるいしんをまはるいしん
赤眼 赤眼をまはるいしんをまはるいしん
花形 花形をまはるいしんをまはるいしん

日雲 日雲をまはるいしんをまはるいしん
明月 明月をまはるいしんをまはるいしん
浦壽 浦壽をまはるいしんをまはるいしん
別業 別業をまはるいしんをまはるいしん
花形 花形をまはるいしんをまはるいしん
日影 日影をまはるいしんをまはるいしん

図版③ 五才・四ウ

廿月

十二日將軍家三首

相美夜ふけりぬ家とてふるはるの春は
紅龍の月もあつちをわかしとあそぶておぼしめ

お目衣初侍
大日中未備前守小野法三首

春日遲山ひかるとておぼしめしとておぼしめし
紅龍の月もあつちをわかしとあそぶておぼしめ

山初鷹さうはるさうりかりとておぼしめしとておぼしめし
湖月さうはるさうりかりとておぼしめしとておぼしめし

風流さうはるさうりかりとておぼしめしとておぼしめし
雲流さうはるさうりかりとておぼしめしとておぼしめし

雪流さうはるさうりかりとておぼしめしとておぼしめし
霜流さうはるさうりかりとておぼしめしとておぼしめし

霜流さうはるさうりかりとておぼしめしとておぼしめし
雪流さうはるさうりかりとておぼしめしとておぼしめし

雪流さうはるさうりかりとておぼしめしとておぼしめし
霜流さうはるさうりかりとておぼしめしとておぼしめし

霜流さうはるさうりかりとておぼしめしとておぼしめし
雪流さうはるさうりかりとておぼしめしとておぼしめし

雪流さうはるさうりかりとておぼしめしとておぼしめし
霜流さうはるさうりかりとておぼしめしとておぼしめし

図版④ 七オ・六ウ